

一般社団法人日本生態学会

No.49

2019年9月

ニュースレター

次々期会長および次期代議員選挙.....	1
第67回日本生態学会大会（名古屋）案内2.....	2
理工チャレンジ「進路で人生どう変わる？理系で広がる私の未来2019」参加報告.....	15
記事	
Ⅰ. 第20回生態学琵琶湖賞受賞者.....	16
Ⅱ. 書評依頼図書.....	16
Ⅲ. 寄贈図書.....	16
お知らせ	
1. 公募.....	16
書評.....	16
京都大学生態学研究センターニュース.....	22

一般社団法人日本生態学会 次々期会長および次期代議員選挙

2019年10月1日

会員各位

一般社団法人日本生態学会選挙管理委員会

定款第6条、第29条ならびに「一般社団法人日本生態学会役員・代議員選任規則」に従って、日本生態学会の次々期会長（理事兼代表理事）候補者と次期代議員の選挙を行います。ぜひ期間内に投票をよろしくお願いいたします。

- (1) 有権者：2019年8月1日の時点で会費を1年間分以上完納した本会の正会員
- (2) 投票期間：2019年10月1日午前0時～2019年10月31日午後5時
- (3) 投票の方法

※ 投票はウェブ上での電子投票となります。

- 1. 投票は右記 URL より行います。 <https://iap-jp.org/esj/vote/member/login>
- 2. 画面に表示される手順にしたがって、**2019年10月31日午後5時まで**に投票を完了してください。

第 67 回日本生態学会大会（名古屋）案内（第 2 報）

第 67 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ67）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

大会参加および講演・企画の申込は、大会申込サイトから行っていただきます。9 月末頃稼働の予定ですので、大会公式ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/67/>）で随時最新情報をご確認ください。

※ 本大会は、前回神戸大会で実施された変更（シンポジウム+自由集会、自由集会聴講券の発行、シンポジウム・英語口頭発表賞の事前申込不要、日本分子生物学会との学会連携など）を踏襲します。

訂正事項

大会案内 1（ニュースレター No.48、<http://www.esj.ne.jp/esj/newsletter/No48.pdf>）では、非会員が講演・企画を希望する場合（シンポジウムでの招待講演を除く）は、「講演・企画申込み前に学会への新規入会申込を行い、大会開催日までに会費を納入して学会員となって下さい」とありましたが、「講演・企画申込み前に学会への新規入会申込を行い、2020 年 2 月 12 日までに会費を納入して学会員となって下さい」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

今大会の主な変更点

一般講演（ポスター）の発表総数に上限を設定します

例年の一般講演（ポスター）の発表総数は賞応募・一般それぞれ 500 件未満で、500 件を目安に会場の準備を進めてきました。しかし賞応募者は年々増え、ESJ66 ではポスター賞応募数が 512 件となり、500 件を超えてしまいました。ESJ62 のポスター賞応募数が 402 件であったため、ここ 5 年で実に 1.3 倍も増えたことになります。1 日で 500 枚以上を展示できる会場を全国の各地区で確保するのは容易ではありません。また、応募者数に応じた審査員を確保することもとても難しくなっています。以上の状況から、本大会における一般講演（ポスター）の申込総数の上限を賞応募・一般それぞれ 500 件に設定します。申込は先着順とし、上限に達した場合はそれ以外の講演を選んでいただくことになります。例えば、賞応募が上限に達した場合は一般ポスターと口頭しか選択できないように、賞応募と一般ポスターのどちらも上限を上回った場合は口頭しか選択できないような仕様となります。

一方でこれによって、学生や若手の発表の機会が失われないように配慮します。賞応募と一般ポスターで合計 1000 件の発表機会を確保し（ESJ66: 918 件、ESJ65: 895 件、ESJ64: 955 件）、口頭での一般講演も含め、これまでの規模での発表の機会を維持します。また、申込システムでは、賞応募と一般ポスターの申込数がリアルタイムで表示されるようにし、講演希望者の利便性を高めるようにします。以上、日本生態学会の持続的な大会運営について、ご理解のほどよろしく願いいたします。

フォーラムに関するルールが明確になりました

正会員は、大会参加申込の有無に関わらず、フォーラムには無料で参加することができます。非会員の参加や話題提供など、その他の詳細についても、フォーラムの項目でご確認ください。

大会実行委員会

第 67 回日本生態学会大会（ESJ67）実行委員会
大会会長：日野輝明（名城大学） 大会実行委員長：橋本啓史（名城大学）
大会実行副委員長：中川弥智子（名古屋大学）
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/67/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。

日程・会場

日程：2020年3月4日（水）～8日（日）

会場：名城大学天白キャンパス（<https://www.meijo-u.ac.jp/about/campus/tempaku.html>）

ESJ67の主な日程は下記のとおりですが、申込状況によって変更されることがあります。詳細なスケジュールは、プログラムおよび大会公式ホームページでお知らせします。

- 3月4日（水） 各種委員会、自由集会
- 3月5日（木） シンポジウム、一般講演（口頭）、自由集会
- 3月6日（金） シンポジウム、一般講演（口頭）、懇親会
- 3月7日（土） 総会、授賞式・受賞講演会、一般講演（ポスター）、自由集会
- 3月8日（日） シンポジウム、一般講演（ポスター）、自由集会、高校生ポスター、公開講演会

各種締切

・講演または企画のための新規入会・再入会

非会員の入会申込	2019年10月31日（木）23:59
非会員の学会費入金	2020年2月12日（水）まで

（入会手続き <http://www.esj.ne.jp/esj/Nyukai.html> を参照）

※オンライン入会ページより入会申込みの後、会員業務窓口より仮会員番号を通知します。仮会員番号を用いて以下の集会および講演の申込みを行ってください。

※入会申込は随時受け付けますが、講演・企画申込のためには2019年10月31日23:59までに新規入会申込を行ってから講演・企画申込をする必要があります（講演・企画申込が23:59を超えてはいけません）。

・講演者・企画者に関して

申込	シンポジウム	2019年10月31日（木）23:59
	自由集会	
	一般講演	
	英語口頭発表賞	
	高校生ポスター発表	
講演要旨登録	各種集会・一般講演	2020年2月12日（水）23:59
	高校生ポスター	
一般講演口頭発表用ファイルの登録		発表当日 12:00

※ESJ66から、アップロードによる一般講演口頭発表用ファイルの事前登録が廃止され、USBメモリで発表当日までに持参いただくことになりました。詳細は、口頭発表の方法をご覧ください。

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページでご確認ください。

※各締切日の17:00～23:59はお問い合わせに対応できません。様々な手順の確認はお早めをお願いします。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には対応できません。

諸経費の金額と支払い方法

※学会費と大会参加費は納入先が異なります。

学会費

講演・企画を希望される場合は、締切までに2020年からの入会が必要です。入会申込後、2020年2月12日までに学会費をお支払いください（会費未納により会員資格停止された方の再入会を含みます）。

既会員が講演・企画をされる場合は、同期日までに2019年学会費入金が必要です。

※入金後の学会費返金・入会年の変更には応じられません。

入会申込はこちら：<http://www.esj.ne.jp/esj/Nyukai.html>

入会に関する問合せ先（大会に関する問合せには対応できません）
 一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口
 〒 162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター
 Email: esj-post@bunken.co.jp
 TEL: 03-6824-9381 FAX: 03-5227-8631
 受付時間 平日 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00（土日祝を除く）

大会参加費・懇親会費

・大会参加費

会員種別		2020年1月17日(金)まで	2020年1月29日(水)まで	大会当日
一般	会員	12,000円	13,000円	14,000円
	非会員	13,000円	14,000円	15,000円
学生	会員	5,000円	5,500円	6,000円
	非会員	6,000円	6,500円	7,000円

※大会参加費の前納金額は、期日までに支払手続きを完了した場合に適用されます。支払い手続きは、大会申込サイトから行っていただきます（9月末頃稼働予定）。

※聴講のみの学部学生以下の学生は、当日受付に限り会員・非会員とも無料です。事前申込は行わずに、当日受付にて学生証をご提示ください。

・懇親会費

会員種別	2020年1月29日(水)まで	大会当日
一般（会員・非会員とも）	10,000円	11,000円
学生（会員・非会員とも）	5,000円	6,000円

※懇親会の当日受付は空きがある場合に限りしますので、なるべく事前申込みをしてください。

懇親会参加者付き添いの子供（20歳未満）については、以下の通り料金を設定して、当日受付を行います（事前申込はありません）。付き添いのない20歳未満の方は懇親会に参加できません。

未就学児	無料
小中学生	1,000円
高大生	4,000円

- ・日本生態学会の会員手続きにおいて「定収入のない若手会員」の参加費、懇親会費は「学生」として扱えるよう準備していますので、「定収入のない若手会員（2020年）」と認められた方はその旨を明記して大会参加申込をしてください。
- ・懇親会の目的は、日頃は接する機会が少ない研究者同士が気楽な空気のなかで交流を図ることにあります。とりわけ学生には、異なる研究分野や機関の研究者・学生と出会い、研究の幅を広げる機会として、重要な役割を果たしてきました。今大会の懇親会でも、学生の会費を低めにしておりますので、一般・学生ともに多くの皆さまにご参加いただき、有意義で楽しい交流の場として懇親会をご活用いただければ幸いです。
- ・大会参加費および懇親会費については2020年1月29日（水）取消分まで全額を返金します（振込手数料等の経費は除く）。それ以降は返金できません。

参加・講演申込

- ・大会参加および講演・企画の申込は、大会申込サイトから行っていただきます。9月末頃稼働の予定ですので、大会公式ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/67/>）で随時最新情報をご確認ください。
- ・講演・企画の申込み手続きの詳細は、以下の「各種集会の企画申込」または「一般講演」の項目をご確認ください。
- ・すべての申込について、締切後の申込は一切受け付けられません。また、入力ミスは原則として訂正しない方針です。文字化けについても対応いたしませんので、十分ご注意ください。

大会参加資格一覧

会員と非会員の大会参加資格は以下の通りです。非会員の資格は限られますので、この機会にぜひご入会ください。なお、企画・講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別\会員種別	正会員 (名誉会員含む)	非会員	分子生物学会員
一般講演（口頭・ポスター）* ¹	○		
シンポジウム・自由集会の企画* ²	○		○* ⁵
シンポジウム講演* ¹	○	○* ⁴	○* ⁶
自由集会講演* ¹	○		○* ⁶
シンポジウム・自由集会のコメンテータ・意見表明* ³	○	○	○

*¹ 講演の主たる説明者を意味します。共同発表者は正会員である必要はありません。

*² 共同企画者も正会員もしくは分子生物学会員に限ります。

*³ 要旨を登録しないコメンテータや意見表明を指します。要旨登録を行う場合は「講演」となりますので、2019年10月31日（木）までに正会員になっておく必要があります。

*⁴ 企画者に招待された方に限ります。

*⁵ シンポジウム招待講演者と同等の扱いとなります。

*⁶ 招待講演扱いとなります。

・非会員が講演・企画を希望される場合（シンポジウムでの招待講演を除く）は、講演・企画申込み前に学会への新規入会申込を行い、2020年2月12日までに会費を納入して正会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。

・高校生ポスター発表会に参加される高校生（中学生含む）については、高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学」の案内をご覧ください。

聴講者としての大会公式行事への参加

・非会員の方でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴講者として参加できます。

・会員・非会員ともに、大会申込サイト（9月末頃稼働）から大会参加申込を行い、大会参加費を納入してください。当日参加も可能です。

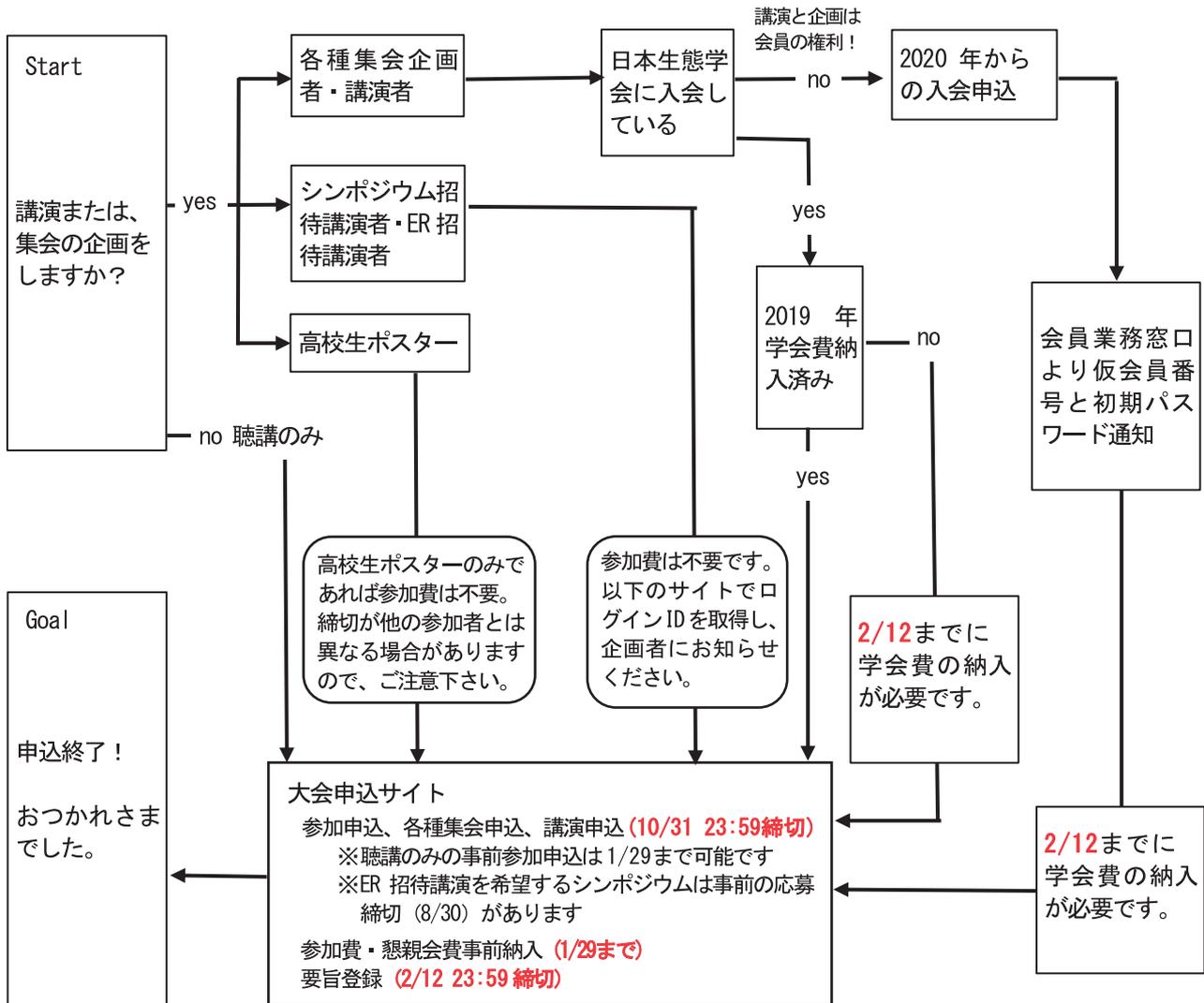
・自由集会の大会公式行事化に伴い、ESJ66からは自由集会のみの聴講も有料となりました。自由集会のみの聴講の方には、自由集会聴講券1,000円を販売しますので、当日受付にてお求めください。

・大学の学部学生以下（中・高校生を含む）の大会参加費は、聴講者としての参加の場合、無料です（事前申込は行いませんので、当日大会の受付に学生証提示の上お申し出ください）。

・高校生ポスター発表会での発表も無料です。ただし、その他の一般講演などで発表する場合は、大会参加費の支払いを含む通常の手続きが必要です。

参加・講演申込フローチャート

- ※自由集会のみの聴講者は、会員、非会員にかかわらず、参加・講演申込は不要ですが、当日 1,000 円で販売する自由集会聴講券が必要です。
- ※フォーラム講演者の講演申込は不要です。他のプログラム（シンポジウム、自由集会、一般講演など）の聴講・講演がある場合は、以下の手順による大会申込が必要です。
- ※シンポジウム非会員講演者（ER 招待・招待講演者）は懇親会参加申込を大会申込サイトから行って下さい。懇親会費については、ER 招待講演者は無料、招待講演者は有料となります。



名札の事前郵送

- ・当日受付の混雑解消のため、2020年1月29日（水）までに大会参加費を振り込まれた方には、大会申込サイトで登録した住所（日本国内の場合のみ）に名札などを郵送します。当日ご持参の上、直接、会場にお入りください。
- ・2020年1月29日（水）までに振り込まれなかった方や、大会申込サイトの登録住所が海外になっている方には、当日受付でお渡しします。
- ・名札をお忘れになった場合は、当日受付にお申し出ください。
- ・大会参加費を振り込んだにも関わらず、2月26日（水）までに名札が届かない場合は、大会公式ホームページの問い合わせページからお問い合わせください。

大会プログラム

- ・大会プログラムは、2020年1月下旬頃に大会公式ホームページで公開され、どなたでもご覧になれます。
- ・大会プログラムの冊子は、名札とともに郵送する引換券により、当日会場にてお受け取りください。※事前送付はなくなりました。
- ・2020年1月29日（水）までに振り込まれなかった方や、大会申込サイトの登録住所が海外になっている方には、引換券を当日受付でお渡しします。
- ・引換券をお忘れになった場合は、当日受付にお申し出ください。
- ・大会参加費を振り込んだにも関わらず、2月26日（水）までに引換券が届かない場合は、大会公式ホームページの問い合わせページからお問い合わせください。
- ・プログラム冊子は、当日受付にて1冊1,000円で販売します。必要な方は、お求めください。

講演要旨集

- ・講演要旨集は、HTML版で作成し公開します。
- ・講演要旨集は、2月中旬頃に大会公式ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/67/>）から閲覧できる予定です。また、大会のすべての講演要旨は学会サイト（<http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/>）からZIP形式の圧縮ファイルで入手でき、ネット上と同じく、閲覧および日程表、講演者やキーワードの検索が可能です。

各種集会の企画申込

- ・前大会 ESJ66 から各種集会が再編成され、「シンポジウム」、「自由集会」、「フォーラム」の3種類になりました。シンポジウムと自由集会は前大会に変更された内容や申込要件を踏襲します。下の注意事項を必ずご確認の上、お申込みください。その他の詳細はニュースレター No.48（2019年5月発行）もご覧いただくとともに、大会公式ホームページを随時ご確認ください。
- ・シンポジウム・自由集会の開催を希望される方は、2019年10月31日（木）23:59までに大会申込サイトから集会の提案・概要登録を行ってください。企画提案時の入力内容がそのままプログラム・要旨集に掲載されます。差し替えには一切応じられませんので、ご了承ください。
- ・また、企画申込みには、企画者・共同企画者・講演者（主たる説明者、以下同様）が大会申込サイト上で申込者情報の登録をあらかじめすませておく必要がありますので、早めのご準備をお願いいたします。会員番号は、マイページの会員検索機能によっても調べることができます（同姓同名にご注意ください）。

シンポジウム

【企画者】

- ・ESJ66から事前提案と審査のプロセスがなくなりました。大会申込サイトに直接アクセスし、申込みを行ってください。ただし、ER招待講演を希望するシンポジウムは、事前の応募締切（2019年8月30日（金）23:59）があります（ニュースレター No.48 参照）。
- ・企画者がすべての講演をまとめて登録します。企画者は申込み前に、日本語・英語両方の各講演情報（講演タイトル、講演者・共同発表者の氏名・所属）および企画者・共同企画者・講演者の会員番号（招待講演者についてはログインID）をあらかじめ集約しておいてください。
- ・申込みサイトにアクセスし、シンポジウムタイトル、集会要旨（日本語 800文字 / 英語 200words 以内）、各講演情報を入力してください。なお、ERシンポジウムの集会要旨は英語での登録に限ります。また、ESJ65までと異なり、共同発表者の情報もこの入力により確定するため、講演要旨登録時には変更できませんのでご注意ください。

【講演者】

- ・大会企画委員会から認められた海外からの ER 招待講演者および非会員の招待講演者（分子生物学会員を含む）を除き、申込・講演できるのは 2019 年 10 月 31 日（木）までに入会申込みを行い、2020 年 2 月 12 日までに学会費の納入をすませた正会員と名誉会員のみ（本案内中の正会員という表記にはすべて名誉会員を含む）です。
- ・ER 招待講演者・招待講演者以外の各講演者は、大会申込サイトから大会参加費を納入してください。
- ・各講演者は、日本語・英語両方の各講演情報（講演タイトル（日本語全角 40 文字 / 英語半角 150 文字以内）、講演者・共同発表者の氏名・所属）および講演者の会員番号（招待講演者についてはログイン ID）をあらかじめ企画者にお知らせください。
- ・各講演者は、2020 年 2 月 12 日（水）までに大会申込サイトから講演要旨（日本語 800 文字 / 英語 200words 以内）を登録してください。

自由集会

【企画者】

- ・ESJ66 から自由集会も公式行事となりました。それに伴い、要旨登録を行う講演をすることが可能になります。
- ・これまでの意見表明やライトニングトークのように、要旨登録を行う講演のない集会を開催することも可能です。この場合は講演登録の手続きを行う必要はありません。プログラムには、集会要旨の情報のみが掲載されます。
- ・企画者は申込み前に、日本語・英語両方の各講演情報（講演タイトル、講演者・共同発表者の氏名・所属）および企画者・共同企画者・講演者の会員番号をあらかじめ集約しておいてください（要旨登録を行わないコメントや意見表明を行う方の会員番号入力不要です）
- ・大会申込サイトにアクセスし、自由集会タイトル、集会要旨（日本語 800 文字 / 英語 200words 以内）、各講演の情報を入力してください。ESJ65 までと異なり、共同発表者の情報もこの入力により確定するため、講演要旨登録時には変更できませんのでご注意ください。
- ・要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、講演には数えません。そのため、要旨登録を伴わないコメントや意見表明を行う方の情報は講演者としては登録せず、集会要旨の中に記載してください。

【講演者】

- ・申込・講演できるのは、2019 年 10 月 31 日（木）までに入会申込みを行い、2020 年 2 月 12 日までに学会費の納入を済ませた正会員のみです。非会員の方に招待講演をしていただくことはできません（要旨登録を行わないコメントや意見表明は可能です）。ただし、分子生物学会員については日本分子生物学会との学会連携に伴い、自由集会での招待講演が可能です。
- ・各講演者は大会申込サイトから大会参加費を納入してください。
- ・日本語・英語両方の各講演情報（講演タイトル（日本語全角 40 文字 / 英語半角 150 文字以内）、講演者・共同発表者の氏名・所属）および講演者の会員番号をあらかじめ企画者にお知らせください（要旨登録を行わないコメントや意見表明を行う方の会員番号入力不要です）。
- ・要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、講演には数えません。そのため、要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、発表の重複制限の対象とはなりません。どの集会で発表を行っているのか把握できないため、シンポジウムとのスケジュール調整は事実上不可能です。
- ・各講演者は、2020 年 2 月 12 日（水）までに大会申込サイトから講演要旨（日本語 800 文字 / 英語 200words 以内）を登録してください。※ 自由集会の公式化に伴い、要旨登録を行う講演が可能になりました。

シンポジウム・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。	様々な話題を自由に議論できる場。
開催時間	約3時間	約1.5時間
開催の優先度	最優先されます。	会場が足りない場合は抽選で採否を決定します。
日程・時間	最優先されます（聴講者の集まりやすい日時に割り当てられます）。	夕刻を中心に、シンポジウムの枠が空いている日時に割り当てられます。
企画委員会の関与	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	
企画者の資格	正会員もしくは分子生物学会員	
非会員による講演	奨励します（招待講演者として参加費を免除します）。	認められません（要旨登録を行わないコメントや意見表明は可能です）。ただし、分子生物学会員は招待講演が可能です。
海外からのER招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で1名以上認められます。	なし。
企画者・講演者の一般講演	不可	可（分子生物学会員を除く）
企画者・講演者の他集会の企画・講演	不可	
提案締切日	10/31（木）	
概要登録/集会の概要及び講演者（共同発表者含む）と発表タイトルの登録締切日	10/31（木）	
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	

フォーラム

フォーラムとは、生態学会の各種委員会が企画し、生態学会の運営や学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すとともに、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。正会員は大会参加申込の有無に関わらず、フォーラムには無料で参加することができます。フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複講演制限の対象となりません。申込は各委員会代表者が行います。フォーラムの開催希望について8月に学会事務局から聴き取りを行っていますので、それに対する企画提案のみを受け付けます（締切2019年9月15日（日））。企画案は、理事会での審議にかけられ、最終的に大会企画委員会および実行委員会との調整の上で、最終的な採択の可否が決定されます。これらの協議の過程で、内容の修正や開催形態の調整を求められることがあります。フォーラムの開催時間は約1.5時間です。

注意：

- ・非会員の大会参加者（大会参加費支払者）も、フォーラムに参加することができます。
- ・非会員の自由集会聴講券の利用者は、フォーラムに参加することはできません。
- ・フォーラムに招待された非会員講演者は、フォーラムのみ無料で参加することができます。シンポジウムや一般講演など他のプログラムへの無料参加はできないため、参加する場合は大会参加費を支払う必要があります。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申込時に希望（口頭発表かポスター発表）をお聞きしますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・本大会は一般講演（ポスター）の申込数について、賞応募・一般それぞれ500件という上限を設定します（詳しくは「生態学会大会の主な変更点」をお読み下さい）。
- ・口頭発表には、英語口頭発表賞の審査対象者を含めた英語セッションと通常のセッションがあります。通常のセッションにおいて英語で発表することも可能です。

- ・海外からの招待者や留学生など、日本語を解さない参加者との交流のためにも、日本語の発表の場合でも一部英語併記を推奨します。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、講演申込時に希望分野を選んでいただきます。一般講演申込のフォームに選択可能な分野一覧が示されますので、第三希望までお選びください。以下は講演申込のときに示される発表分野（候補）の一覧です。

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／菌類・微生物／景観／遷移・更新／動物と植物の相互関係／進化／生物多様性／数理／動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／行動／保全／生態系管理／外来種／物質循環／生態学教育・普及

- ・英語口頭発表賞に申込みされる方も含め英語セッションでの発表を希望される方については、企画委員会が希望分野に応じた分野の統合を行います。

注意：

- ・一般講演の講演者（主たる説明者、以下同様）は、日本生態学会の正会員に限ります（共同発表者は正会員である必要はありません）。
- ・講演者は、締切までに、大会申込サイトから講演申込を行うとともに、大会参加費を納入してください。
- ・講演申込には、日本語・英語両方の講演タイトル（日本語全角 40 文字 / 英語半角 150 文字以内）や講演者名などが必要となります。
- ・2020年2月12日（水）までに大会申込サイトから講演要旨（日本語 800 文字 / 英語 200words 以内）を登録してください。
- ・1人で2つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムの企画者・講演者は一般講演を行うことができません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご理解ください。

口頭発表の方法

- ・前回大会から、発表用ファイルの登録は、事前のインターネットを介した登録ではなく、大会中の会場での登録に変更になっています。
- ・口頭発表は、会場備え付けのパソコン（OSはWindows）を使用したマイクロソフト・パワーポイント（pptあるいはpptx）あるいはアドビ・アcroバットリーダー（pdf）による発表とします。持ち込みのパソコンは使用できません。
- ・ファイルサイズは100MB以下としてください。
- ・発表用ファイルをUSBメモリに保存して会場のスピーカーレディールームに持参し、発表当日の12:00までに発表用パソコンにコピーしてください。この時間までにコピーしなかった人は発表キャンセルとなりますのでご注意ください。
- ・ファイル受付の詳細は大会公式ホームページで追ってご案内します。

ポスター発表の方法

- ・ポスターボードは縦長（90 cm x 210 cm）のものを使用する予定です。ポスター発表は、大会期間中に2日に分けて行い、最大約1,000件のポスター発表を収容できる予定です。本大会は一般講演（ポスター）の発表総数の上限を賞応募・一般それぞれ500件に設定します。申込は先着順とし、上限に達した場合はそれ以外の講演を選んでいただくことになります。例えば賞応募が上限を上回った場合は、一般ポスターまたは口頭しか申し込むことができません。賞応募と一般ポスターのそれぞれが上限に達した場合は、口頭しか選択できないようになります。
- ・海外からの招待者や留学生など、日本語を解さない参加者との交流のためにも、英語での発表や、日本語の発表の場合でも、一部英語を併記したり、英語版の別刷りを用意したりすることを推奨します。
- ・ポスターを貼るための画鋏は持参してください。例年、会場周辺の店舗では品薄になりますので、ご注意ください。

ポスター賞

若手研究者の研究活動を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。応募資格については、下記をご参照ください。ポスター発表に関する詳細は大会公式ホームページにも掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。

ポスター賞応募資格について

本大会では、講演者のポスター賞応募資格について以下の条件を設けます。

1. 一般講演の申込締切期限（2019年10月31日）の時点で**博士号未取得の学生会員**とします。
2. **過去の日本生態学会大会（ESJ）ポスター賞「最優秀賞」または「優秀賞」を受賞した者は、上記の条件を満たしていても応募できないもの**とします。過去の日本生態学会大会はEAFESと合同で運営された大会を含みます。

ポスター賞審査の要点

- ・選考上重視されるポイントには以下のようなものがあります。ポスター賞応募者は、これらの点に十分考慮してポスター作成をお願いします。

(A) ポスターの情報伝達能力

ポスター発表では、研究内容がわかりやすく表示されているかが重要です。例えば、(1) 良いタイトル、(2) わかりやすい要旨、(3) 視線を引きつける工夫、(4) 短時間でおおまかな内容が伝えられる工夫などが必要でしょう。そのためには、字・図表が遠くからでも判読できる、情報過多でない、説明なしでも要点が理解できることが重要です。公平性を期すために、演題タイトルの受付登録後の変更はお控え下さい。

(B) 研究の質

(1) 新規性・独創性、(2) データの質・量、(3) 解析方法の妥当性、(4) 議論・結論の妥当性について審査されます。

- ・**なお、過去に審査対象であった「発表技術」は、審査対象に含まれません。**優れたポスターは読んだだけでその意義を理解できると考えられるためです。また、ポスター賞の応募者が多いため、審査に要する負担が著しく高まっていることも理由の一つです。ただし、ポスターを見ただけでは評価しにくい項目については、審査員が発表を聴き質問して評価することがあります。
- ・また、本学会では国際交流に力を入れて取り組んでいます。このため、**日本語を理解しない研究者に対して配慮がなされているかも重視します。**審査の際には使用言語に関わらずポスターの内容についてのみ評価しますが、審査の結果同票だったポスターについては英語による理解が可能なポスターの順位を繰り上げます。英語による理解が可能なポスターとは、少なくとも、タイトル、イントロおよび結論が英語併記される等して、英語を読むだけで研究の概要を理解できる場合、あるいは英語の別刷りが用意されている場合に該当します。
- ・使用言語を「英語」、もしくは「バイリンガル」とした場合、発表当日に掲示するポスターは英語で作成して下さい。

高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学」

- ・高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学」は、生態学の社会への普及のため、日本生態学会によるアウトリーチ活動の一環として企画します。高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
- ・「みんなのジュニア生態学講座—高校生と研究者の交流会」も今年で6年目を迎えます。現在活躍中の生態学者の高校生や大学生の頃や現在の研究に至った経緯などを話してもらい、高校生に研究者を身近に感じてもらう交流会を行います。詳細は随時、大会公式ホームページなどでお知らせします。

要項

【日時】2020年3月8日（日）

開場：9:30（名城大学天白キャンパス共通講義棟北一階で受付をすませてポスターを貼り出してください）

発表コアタイム（発表・審査）：10:30～11:30（奇数番） 11:30～12:30（偶数番）

みんなのジュニア生態学講座（高校生と研究者の交流会）：13:50～14:50

表彰式：15:00～15:30

【会場】名城大学天白キャンパス 共通講義棟北 地下一階 名城食堂

【参加費】無料。発表者（人数に制限なし）および引率者（1校につき2名まで）は、大会参加費が免除されます。

【発表資格】 原則として、高等学校（中学校）または高等学校に相当する教育機関に在籍する生徒であること。国籍は問いません。

【発表内容】 生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも受け付けます。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。

【発表数】 本大会においては、**1校あたりの発表数は最大2件までとします**。ただし、発表の応募総数が**50件**を超えた場合は、発表件数の多い高校を対象に、発表数の調整をお願いすることがあります。

【発表方法】 本大会の指定するパネルサイズ（横90cm x 縦210cmの予定）に納まるポスターをご準備ください。当日、9:30にはポスターを貼ることができます。発表者（複数可）は、発表コアタイムにポスターの説明を口頭で行ってください。

【審査員】 ポスター1件につき複数名の審査員が配置され、質問やコメント、アドバイスをします。

【ポスター賞】 選考委員会が内容を評価し、発表されたポスターは最優秀賞、優秀賞などとして表彰します。

【みんなのジュニア生態学講座－高校生と研究者の交流会】 日本生態学会で現在大活躍中の研究者3名に、ご自身の研究内容だけでなく、生態学の研究を目指したきっかけや中学～高校の様子を語っていただきます。

- ・鏡味麻衣子（横浜国立大学）「身近な水辺に広がる生物間相互作用（仮）」
- ・向井裕美（森林総合研究所）「振動を巧みに操りコミュニケーションする虫たち（仮）」
- ・渡邊謙太（沖縄工業高等専門学校）「島の生物は面白い！（仮）」

申込み手順

- ・発表申込は大会申込サイトからオンラインで受け付けます。発表を希望する高校は、大会公式ホームページで随時最新情報をご確認ください。9月末頃に受け付けを開始し、**2019年10月31日（木）23:59を締切**とする予定です。なお発表希望申込数が非常に多い場合には、申込先着順で打ち切る可能性もありますので、早めの申込みをよろしく願いいたします。
- ・申込者は顧問の教員または保護者とします。必ずしも、大会当日に生徒を引率する方でもかまいませんが、要旨登録などの諸手続きに責任を負っていただける方にしてください。
- ・発表内容の要旨（日本語で800字以内）は、**2020年2月12日（水）23:59**までに同じくオンラインシステムから登録していただきます。
- ・問い合わせは、大会公式ホームページの「お問い合わせフォーム」をご利用ください。
- ・ESJ67の高校生ポスター発表に係る派遣依頼文書は担当者より2月中旬までにメール等で送付予定です。定められた様式がある場合には上記「お問い合わせフォーム」よりお問い合わせください。
- ・当日の発表は学生のみでも構いません。

【注意】

申込内容や要旨の修正の要望が例年多数寄せられます。タイトルと発表者は、十分検討してから登録してください。正誤表掲載希望は、よほどのことがない限り受け付けられないのが慣例です。また、仮に正誤表掲載となった場合、正誤表のみの対応となり、プログラム冊子および賞状には反映されませんのでご了承ください。

英語口頭発表賞 EPA

本大会では、第7回英語口頭発表賞への応募者を募集します。

英語口頭発表賞の目的

英語口頭発表賞（English Presentation Award, EPA）の設立目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場をより多く作ることです。同時に、特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やしたいと考えています。

本賞は英語の流暢さなどの言語能力を競うものではありません。応募者には発表の学問的内容と発表技術や姿勢を競っていただき、優れた発表と判断されたものに英語口頭発表賞を授与します。

重要なお知らせ

ESJ67の第7回英語口頭発表賞では、これまでと比べて3つの重要な変更があります。

- 1) 英語口頭発表賞部会が独自で行っていた事前登録がなくなります。英語口頭発表賞の登録も他の口頭発表やポスター発表と同じプロセスを経ることになります。
- 2) 英語口頭発表賞に関する情報は、EPA独自のwebsiteではなく、基本的に大会公式websiteで公開されることになります。過去の英語口頭発表賞のwebsiteへのリンクはこちらです（<https://esj66epa-jp.weebly.com/>）。

3) 他の一般講演（口頭）と同様、発表ファイルを大会前に事前アップロードする制度がなくなり、発表セッション当日までに持参いただくこととなります。EPA セッション当日の締切時刻までに、発表ファイルを USB メモリに入れてスピーカーレディールームへお持ちください。詳しい情報は追って公開いたします。

応募資格

日本生態学会の会員で、学生（学部、修士課程、博士課程）または 2020 年 3 月までで学位取得後 5 年以内の若手研究者であること。育児 / 介護休暇はこの 5 年間に含めません。過去の英語口頭発表賞の受賞者も応募可能です。なお、この応募資格は、次回大会の ESJ68 から変更になる可能性があります。

審査基準

各部門に数人の審査員が割り当てられ、全ての発表は研究の質（50%）と発表の質（50%）を審査され、採点されます。部門ごとに得点を集計し、原則としてそれぞれの部門の 1 位と 2 位の発表者に最優秀賞と優秀賞が与えられます。

大会参加および講演の申込は、大会申込サイトから行っていただきます。9 月末頃稼働の予定ですので、大会公式ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/67/>）で随時最新情報をご確認ください。英語口頭発表賞部会では皆様のご応募を心からお待ちしております。

キャリアエクスプローラー（CE）イラストの表示

講演者である学生・ポスドクは、本人が希望する場合、求職中であることを示すキャリアエクスプローラーイラストを口頭発表やポスター発表の際に表示することができます。

（公社）応用物理学会 HP <https://www.jsap.or.jp/jsap-meeting/career-explorer> からダウンロードし、口頭発表のタイトルページやポスターのタイトル付近に表示してください。CE イラストの使用許可は取得済みです。

色覚多様性への配慮

日本人男性の約 5%、白人男性の約 8% が赤や緑の混じった特定の範囲の色について、差を感じにくいという視覚特性を持っています。このような状況を踏まえ、岡部正隆氏（東京慈恵会医科大学解剖学講座）と伊藤啓氏（東京大学分子細胞生物学研究所）が「色覚バリアフリープレゼンテーション法」の普及をすすめられています。岡部氏のホームページ <http://cudo.jp/cbf/> をご覧いただき、発表用の図表作成の参考にしてください。

日本生態学会第 23 回公開講演会

生態学は、生物と環境とのかかわりを対象領域とするが、その環境は人間活動の影響で変動してきた歴史もち、また近年はその変動の増大が環境問題の深刻化をもたらしている。半自然草原は火入れ・採草・放牧などで維持されてきた草原を意味するが、日本の半自然草原には約 1 万年の歴史があり、里山の構成要素として重要な位置を占めてきたことが近年の研究でわかってきた。この歴史の解明には、土壌学・歴史学などの関連分野とともに生態学の多面的なアプローチがかかっている。しかし 20 世紀以降、草原の生物資源を利用する生活が衰退したことにより、日本の草原面積は大きく減少しており、その結果多くの草原性の動植物で絶滅が危惧される状況となっている。この講演会は、最近の研究であきらかになりつつある半自然草原の歴史とその多面的な研究成果を広く市民に紹介するとともに、半自然草原の今後の保全・再生に向けてさまざまなセクターからの参加と協力が必要であることを呼びかける機会としたい。

講演会タイトル：「草原の 1 万年史 ひとがつくってきた生態系」

日時：2020 年 3 月 8 日（日）14:30～17:00（予定）

会場：名城大学天白キャンパス 共通講義棟北 N101 (<https://www.meijo-u.ac.jp/about/campus/tempaku.html>)

講演者

湯本貴和（京都大学）、岡本透（森林総合研究所）、中浜直之（兵庫県立大学）、津田智（岐阜大学）、内田圭（東京大学）、須賀丈（長野県環境保全研究所）他

懇親会

懇親会は3月6日（金）にメルパルク名古屋で行われます。参加申込と会費納入は大会申込サイトからお願いします。

託児室、ファミリー休憩室

2020年3月4日（水）～8日（日）の会期中、大会会場に託児室、ファミリー休憩室を設置する予定です。開設時間や利用方法（託児室については申込方法）などの詳細は、大会公式ホームページで追ってご案内します。

障害者への配慮

「障害者差別解消法」に基づく配慮を行いますので、大会参加に際して、配慮を必要とされる方は大会公式ホームページの問い合わせページからご相談ください。講演を希望される方は、できるだけ2019年10月31日までにご相談ください。

エコカップ

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ2020が行われます（3月9日（月）を予定）。主催はエコカップ2020実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

宿泊・交通案内

大会中の宿泊は各自での手配をお願いします。会場の最寄り駅の地下鉄鶴舞線「塩釜口」駅までは名古屋駅から市営地下鉄を乗り継いで約30分、そこから会場まで5分程度です。地下鉄鶴舞線沿線で、多くの宿泊施設が集中する伏見駅や丸ノ内駅周辺が便利です。大会期間中は混雑する可能性もありますので、早めに宿泊の予約をされることをお勧めします。

ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

理工チャレンジ「進路で人生どう変わる？理系で広がる私の未来 2019」参加報告

キャリア支援専門委員会 水野晃子・別宮有紀子

2019年6月8日（土）午後13時より科学技術振興機構（JST）東京本部別館にて行われた「進路で人生どう変わる？理系で広がる私の未来 2019」に日本生態学会としてキャリア支援専門委員2名が参加してブース出展を行った。このイベントは、女子中高生の理工系進路選択の支援プログラムの一環として、内閣府・文科省・JSTの主催で毎年おこなわれている。今年には日本マクドナルドのマーケティング部長であるズナイデン房子氏、VR研究者の早稲田大学玉城絵美准教授による基調講演の他、新しい試みとして、FANCELやお茶の水大学などによるワークショップが開催された。ブース展示では、工学系企業、研究所、大学、高専などの18の団体がそれぞれの団体の紹介を行った。ブース展示を行った団体の多くは工学系の企業や大学で、生物学に関連する団体は、本学会と国立遺伝学研究所、産業技術総合研究所などわずかだったため、女子中高生への生態学の啓蒙というだけでなく、生物学の多様性や奥深さを広めるという意味でも、本学会がこのイベントに参加することは重要であると考えた。日本生態学会のブースでは、昨年人気だった『エコロジー講座』に加えて、生態学を説明するリーフレットや巻き尺、年大会公開講演会の冊子などをノベルティとして配布した。

基調講演や座談会では応用的実務的な分野・企業で活躍する演者が多かったため、応用科学に興味を持つ来場者に偏るのではないかと予想したが、生物学に興味のある生徒も多かった。また、親子連れだけでなく、生物学に興味のある娘を持つ親のみの来場も複数みられた。



図1 ブースで説明する学会員



図2 基調講演の様子

来場者からは、「生態学を学んだあとのどのような職に就いているのかわかるパンフレットはないか？」「分子の実験的な手法に興味があるのでそれらについての冊子はないか？」「生態学は人間も研究対象となりますか？」などの質問が寄せられた。昨年のブース出展と同じく、今回のブースでも『エコロジー講座』は大人気だった。無料で配布していることを告げると皆、「こんな立派で綺麗な冊子がただでもらえるんですか？」と目を輝かせて冊子を手にとり、興味深かそうに読んでいたのが印象的だった。配布物としての冊子は、イベント当日の一時的な効果だけでなく、自宅に持ち帰って読むことができるという点で持続効果があり、生態学の普及のための効果的なノベルティであると考えられる。エコロジー講座のような学問的内容とデザインの双方において質の高い冊子は他に類を見ない。生態学会の社会的プレゼンスの向上のためにも、このような良書をより多くの人に提供できるよう、今後も学会として取り組んでいただければと思う。

記 事

I. 第 20 回生態学琵琶湖賞受賞者

陀安一郎 (総合地球環境学研究所)
安原盛明 (The University of Hong Kong)

II. 書評依頼図書 (2019 年 1 月～2019 年 7 月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 盛口満著「琉球列島の里山誌 おじいとおばあのお昔語り」(2019) 264pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060321-8
2. 粕谷俊雄著「イルカ概論」(2019) 336pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060238-9
3. Mark Vellend 著 松岡俊将・辰巳晋一・北川涼・門脇浩明訳「生物群集の理論 4つのルールで読み解く生物多様性」(2019) 288pp. 共立出版 ISBN:978-4-320-05788-3
4. 田付貞洋・佐藤宏明・足達太郎編「アフリカ昆虫学 生物多様性とエスノサイエンス」(2019) 336pp. (株)海游舎 ISBN:978-4-905930-65-5
5. ジョナサン・B ロソス著 嶋地知之訳「生命の歴史は繰り返すのか? 進化の偶然と必然のナゾに実験で挑む」(2019) 400pp. 化学同人 ISBN:978-4-7598-2007-2
6. 税所康正著「セミハンドブック」(2019) 112pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-8163-4
7. 塚本勝巳編著「シリーズ水産の科学 2 ウナギの科学」(2019) 240pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-48502-8
8. 宮下直・西廣淳著「人と生態系のダイナミクス 1 農地・草地の歴史と未来」(2019) 176pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18541-6
9. 野本寛一著「生きもの民族史」(2019) 650pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1823-5

III. 寄贈図書

1. 「東京大学大気海洋研究所要覧・年報」(2019) 122pp. 東京大学大気海洋研究所

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 鹿島学術振興財団 2019 年度研究助成

- ①主な研究分野：都市・居住環境の向上、国土・資源の有効利用、防災・危機管理の推進、文化・自然環

境の保全

- ②総額約 5,800 万円 (予定)。1 研究課題 300 万円以内
- ③ 2019 年 10 月 31 日 (木)
- ④日本生態学会事務局 (学会推薦が必要です)

(2) 第 58 回 (令和元年度) 下中科学研究助成金

- ①全国小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校及び高等専門学校の教員、並びに教育センターや教育委員会等において教育実務を行う者
- ②総額 900 万円。1 件当たり 30 万円。30 件を予定
- ③令和元年 12 月 10 日当日消印有効
- ④公益財団法人下中記念財団事務局

(3) 公益財団法人長尾自然環境財団 2019 年度研究者育成支援プログラム (CGF)

- ①主にアジア・太平洋地域の途上国における野生動物物の保護や生態系の保全に貢献する調査研究を助成する。対象者は 40 歳未満で前述の地域・国に国籍を持ち、現在対象国内の研究機関で研究に従事し、相応の研究業績を持つ研究者 (プロジェクト・サイエンティスト: PS)。日本の研究機関等に所属経験を持つ研究者で、PS の研究を指導し、PS の所属機関等とも協力が可能な研究者 (プロジェクト・コーディネータ: PC) との共同提案とする。
- ②年間の助成総額 2,000 万円。1 件当たり 150 万円を上限とする (PC の調査旅費は別途支給)。
- ③締切は年 2 回: 2019 年 7 月 31 日必着、2020 年 1 月 31 日必着
- ④公益財団法人長尾自然環境財団

書 評

Peter P. Marra・Chris Santella 原著 岡奈理子・山田文雄・塩野崎和美・石井信夫訳 (2019) 「ネコ・かわいい殺し屋—生態系への影響を科学する」築地書館 288pp. ISBN: 978-4-8067-1580-1 定価 2592 円

イエネコは「世界の侵略的外来種ワースト 100」に入る外来捕食者である (本書 35 頁)。世界の爬虫類、鳥類、哺乳類の絶滅種 238 種のうち 33 種の絶滅の一因が主要因になってきたという (37 頁)。

イヌと違って、ネコは飼っていても野放しにされることが多く、野外の餌を自前で (飼い主の知らないところで) 捕食することがある。本書では、ネコを飼い主のいないノネコ、飼い主はいるが野放しのネコ、もっぱら屋内で飼われるネコを区別し、前 2 者を「野放しネコ (free-ranging cats)」と呼ぶ (70 頁)。前 2 者の間は連続的であり、半飼育ネコ、誰かが餌やりをしているコロニーにいるネコもいる。飼い主のいる野放しネコとノネコは、それぞれ 1 頭あたり 8.7-21.8 頭と 177.3-299.5 頭の哺乳類を年間捕食しているという推定もある (97 頁)。

さらに、ネコはペストや狂犬病も含めて人獣共通感染症を媒介する (第 5 章)。ネコ科動物の腸管内でのみ有性生殖するトキソプラズマは、妊娠中に女性が初感染す

ると胎児に重大なリスクをもたらすことが以前から知られ、近年では広範囲な精神疾患を引き起こすことが明らかになっている(133頁)。トキソプラズマの(出産可能な女性の)罹患率は韓国で4%だがドイツでは63%に達するという(125-129頁)。

野放しネコが野鳥を捕食するため、愛鳥家と愛猫家で深刻な対立がある(第7章)。自然保護と動物愛護は違うといわれるが、愛鳥家と愛猫家の対立は生々しい。野鳥保護のためにネコを個人が駆除することは米国でも動物虐待罪に問われうる(148頁)。他方、絶滅危惧種法では野放しネコが絶滅危惧種を殺した責任が問われうる(151頁)。野放しネコはペットでも有害野生動物でもなく、法律上曖昧な存在である。野放しネコをどう扱うかの政治的合意がないこと自体が問題という(150頁)。

米国でも野放しネコのTNR(捕獲、不妊去勢、再放逐)が推奨されている(180頁)。しかし、TNRは解決にならないと本書は主張する。野放しネコの数が増えるレベルの不妊化率を達成するのは現実的でない(202頁)。ネコに限らず、外来動物を野に放つことは生態系の攪乱要因である。本書では飼主のいない野外ネコの生活が劣悪(68-69頁)だから安楽殺が望ましいという倫理も紹介されている(186頁)が、これはどこまで共感を得るだろうか。

本書はTNRを全否定はしていない(233頁)。そのうえで、「鳥、人、ネコにとって望ましい世界」を第8章で論じる。ネコの室内飼育、野外ではネコに引き綱を付けること、ネコ用テラス(221頁)、マイクロチップの挿入を伴う飼育許可制が薦められている(222頁)。そして、野放しネコをゼロにする究極目標を含む11項目の勧告案(ハワイの事例)を紹介している(232頁)。

ノネコを捕獲したとしても、殺処分するかどうかは別問題だ。個人に譲渡したり、サンクチュアリと呼ばれる専用施設に収容したりすることもできるが、ノネコの個体数と引き取る収容力から見て、限界があるとも指摘している(235頁)。

科学者の役割は、社会の対立を煽ることではなく、科学的根拠やデータを示して、論点を整理することだろう。著者はTNR批判の立場が鮮明だが、論点整理に努めてもいる。しかし、野外への再放逐を伴うTNRを全否定すべきかは、まだ議論が分かれるのではないか。小島嶼部の固有亜種がいる生態系、あるいはもともと類似の天敵がいなかった豪州やニュージーランドでは放し飼いはやめるべきだとしても、たとえば日本の内地で放し飼いは根絶すべきなのか。

著者はもともとネコの家畜化は「片利共生」(28頁)、つまり穀物貯蔵場所に集まる齧歯類を狙うネコの利益だったと説明している。しかし、ネコが齧歯類を捕食するのは人間の利益だったのではないか。仮に放し飼いを認めるとしても、マイクロチップ挿入を含む飼育許可制とTNRは最低限の現実的な選択肢と感じた。躰不足の飼い犬が隣人に危険なように、放し飼いのネコは野生動物を捕食し、感染症を媒介し得る。躰不足の犬のリスクより見えにくいかもしれないが、むしろ深刻だろう。その場合、半飼育や共同飼育のネコも、責任ある飼い主を明

確にすることになるだろう。

(横浜国立大学環境情報研究院 松田裕之)

小池孝良・清水裕子・伊藤太一・芝正己・伊藤精悟 監訳
(2018)「H・フォン・ザーリッシュ 森林美学」海青社
329 pp. ISBN: 978-4860992590 定価 4,000 (+税)

「森林美学」という言葉を聞いた時に、人は何を思い浮かべるだろう。学生時代だったと思うが、初めてこの言葉を聞いた時には、哲学の一種か、はたまた、そのような研究分野が存在するのだろうか、と感じたことを覚えている。ところが、しばらく忘れていたこの言葉は、再注目されている。美学は、「中江兆民の訳語で、自然・芸術における美の本質や構造を解明する学問。美的現象一般を対象として、その内的・外的条件と基礎とを解明規定する。」(広辞苑)とされている。であれば、森林美学とは、森林における美の本質や構造を解明する学問、ということになるだろうか。原著者は、「人は感覚ではなく知性によって美を享受する」と述べている。つまり、今でも、時には無視されることのある森林の「美と有用」の関係を紐解こうとする書である。著者であるザーリッシュ(Heinrich von Salisch, 1846年-1920年)は、ドイツ帝国の富裕地主(Junkers)として保有する膨大な森林を活用した豊富な体験をもとに本書を執筆した。

本書は、1885年にForstästhetik(森林美学, Forest Aesthetics)と題しドイツ語で出版され、1902年に大幅改訂された第二版が出ている。第二版を元に英訳版(2008年)が出版された。原書第三版(最終版)は、1911年にドイツ語で出ている。ドイツ語原書は、日本では明治時代に当たる古風なドイツ語で書かれ、用語や学名の使用法が現在とは異なることも多く、英訳は困難を極めたようである。その結果とってはおかしいかもしれないが、その現代風英語に改められた英語版を元に訳された本書は、平易で読みやすい。また、図版を随所に配置し、さらに読みやすくなっている。

目次は、第1部が「森林美学の基礎理念」、第2部が「森林美学の応用」、というように基礎と応用に分けて整理されている。特に、森林美学を「美学と森林の風景との関係、森林美と樹木の美的価値、森林の装飾と取扱い方法、公園・庭園等の森林美造成の技術的手段」と位置づけて論議を進めている。一見すると、森林の経営論を述べた書、あるいは、単なる技術書であるようにも見える。しかし、その経営の基本的な考え方が、現在のサステナブル林業(持続的林業)に通じ、その源流的な考え方が述べられている。通底する基本的な考え方は、森林美は自然かつ合理的な森林育成により生み出され、収益が高い森林ほど美しい、とするものである。そのための具体的な技術を体系化した書といえる。

木材生産に加え、防災減災を含めた様々な生態系サービスを森林が美を通して提供しているという考え方は、この時代にはほとんど見られなかった。その時代に、持続的な森林管理には「統合された森林経営」の必要不可

欠性を示した本書は、まだ化学合成農薬の危険性が明らかではなかった時代に、過剰な使用に対し警鐘を鳴らした「沈黙の春」にも匹敵する先見あふれる書である。

森林の捉え方に関する本書の影響は、日本では前世紀はじめに、既に強く表れている。1918年に新島善直（北海道帝国大学林学科初代教授）と村山醸造により「森林美学」が出版され、北海道大学では同名の講義も行われていた。新島・村山の「森林美学」は1991年に復刻版が出版されている。二つの「森林美学」の書を読み比べるのも面白い。森林美学と冠する講義はおそらく日本で唯一だろうが、北大では2019年には「森林美学と更新論」という講義が開講されている。このように、彼の見識は海を渡り、大正4年に策定された明治神宮林苑計画にも影響を与えた。即ち、神宮の森の底流には森林美学がある。もっとも、ドイツ林業は、その歴史から人工林が対象であるのに対し、日本では人工林に加え天然林も主な対象となる相違がある。その源流と本質を理解しておくためにも、森林科学とその周辺領域に携わる者、今後携わる気持ちのある者であれば、一読すべき書といえよう。（北大・院地球環境 露崎史朗）

半谷吾郎・松原始著（2018）「サルと屋久島 ヤクザル調査隊とフィールドワーク」旅するミシン店 317pp. ISBN: 978-4-908194-08-5 定価 1,600 円（税別）

「調査隊」。目にするだけでワクワクしてくる字面である。それも京都大学のとなれば、伊谷純一郎、今西錦司、木原均といったレジェンドらの組織した海外学術調査隊のことが否応なく思い浮かぶ。たとえ、その中身については何ひとつ知らなくても、である。今や伝説は遠い過去のものとなり、さらには植民地主義的な学術調査の時代でもない。では、「調査隊」の現代的なリアリティはどこにあるのか。本書は、「調査隊」の響きに憧れる若者の頭上へと注ぐ一条の光（あるいはよく冷えた水）であり、若かりし著者らによる奮闘の赤裸々な記録であり、そして抱腹絶倒のドキュメンタリーである。ついでに、屋久島を舞台にした霊長類学の研究小史でもある。

鹿児島県佐多岬の南南西約 60 km の洋上に浮かぶ屋久島は、島というより山である。標高 2000 m に迫る九州地方の最高峰、宮之浦岳をはじめとする山々が、わずか 500 km² ほどの面積の陸地にずっとそびえ立っている。黒潮を渡る暖かく湿った風は、この山塊に衝突してことごとく雨雲を生ぜしめ、縄文杉に象徴される幽玄の世界を育ててきた。本書で主な舞台となっているのは、その急峻な山肌に発達した照葉樹の深い森である。日本有数の年間雨量を誇るこの地において、30 年の長きにわたって続けられてきた大規模調査がある。参加した人数は延べ 1364 人。乗り潰された自動車は 12 台。テント泊中に炊飯した米は実に 6 トン。調査の対象は、ヤクシマザルである。

ヤクシマザルはニホンザルの亜種で、本種の南限個体群に相当する。霊長類学の黎明期に行われたニホンザルの野外研究は、餌付けされた単独の群れを主な対象とし

てきた。しかしそれでは、群れ同士のせめぎあいを含む、サル本来の社会生態を理解するには甚だ不十分ではないか。そうした批判から着目されたのが、ヤクシマザルであった。人間界からの干渉を受けていない、ニホンザルの自然な暮らしがそこにあるはずだ。そうして 1970 年代なかば、若手研究者らが手弁当で調査隊を結成し、屋久島で一斉調査を行った。このときの大規模調査が、ひとつの流れとなってその後のヤクシマザル研究、ひいては本書で描かれるヤクザル調査隊の方向性を決定した。

通常、大規模なフィールド調査は、目眩のするような人件費と旅費を要する。つまり巨額の研究費が必要となり、その必然として予算を獲得できるだけの力量あるリーダーが必要になる。ところが 1995 年、ヤクザル調査隊を急遽率いることになった本書の著書の一人、半谷吾郎氏は、若干にして学部 3 回生であった。そしてヤクザル調査隊は設立 30 年を経てなお続いている。なぜか。

その秘密は、一種の「市民科学」という調査隊の実態にある。少数の手練が隊を指揮、運営するいっぽうで、多数のボランティアが入れ代わり立ち代わり毎夏全国から集い、マンパワーを要する調査の主体を担う。こんなことが実現できているのは、ひとえに対象生物と場所、そして調査隊というコミュニティの醸す魅力ゆえであろう。これら、野生のサル、屋久島でのフィールドワーク、そして調査隊での暮らしについての魅力が、本書には余すことなく綴られている。

本書は二人の著者による共著だが、執筆箇所の分担は明確である。まず、学術と史実に関わる真面目なパートを主に半谷氏が執筆し、本書の骨子を形成している。そして、食生活やトラブルといった愉快的なパートを、もうひとりの著者である松原氏が執筆している。松原氏はカラスを対象とした行動学を本業としているが、ヤクザル調査隊での深く豊かな経験から、調査生活のリアリティを著すのに適任だったのであろう。また、コラムや人物評伝として挿入された逸話の数々は、他で見聞きできない、大変に興味深いものが多かった。なかでも好廣眞一さんと山極壽一さんの豪放磊落さがひとときわ印象に残っている。

しかし、私が一読してまず思ったことは、これ、出版して大丈夫だったのだろうかという他人事ながらの不安であった。昨今、大学では野外調査時における安全管理の徹底が強く求められている。大学院生の野外調査に指導教員の同行が義務付けられているところもあると聞く。学生が、今夜はいい雨が降りそうだから採集調査に行こうかななどと思っても、その実行はたとえ許されても奨励されることはない。このような世相にあって、強烈な獣臭を放つ本書は、悪書と断じられてもおかしくないかもしれない。「調査隊」に憧れる若者は、本書を読んではいけない。絶対に、絶対に読むなよ。

いや、本当は、これでもまだ抑え気味であることを評者は知っている。なぜなら、私もまたヤクザル調査隊の OB だからである。カビ臭いテントの中でかじったカロリーメイト、ヒルにやられて真っ赤に染まった友人の T シャツ、連日連夜の雨の合間に一晩瞬いた天の川、謎の替え歌。18 歳の夏に屋久島で受けた洗礼は、野外生活

における満足度の基準値を著しく下げ、その後のフィールドワーカーとしての研究活動を容易たらしめた。とはいえ参加したのは一回きりだったので、本書を読んで初めて知ったこと、今にして意味のわかることが多く、いろいろと合点のいく読書経験であった。内輪向けという評価は免れないかもしれないが、「読むな」と煽られて本書を手にとってしまうような若者の読書衝動を妨げるほどのことはないであろう。

(東京大学大学院理学系研究科 細将貴)

**門脇浩明・立木佑弥編 (2019)「遺伝子・多様性・循環の科学：生態学の領域融合へ」京都大学学術出版会
ISBN: 978-4814001903 定価 3,700 円+税**

生命現象には階層性がある。分子生物学や細胞生物学などとは対照的に、生態学で扱われるのは個体以上の階層だと言われているが、個体群生態学や群集生態学、生態系生態学などの言葉から分かるように、生態学の中にも階層に沿った区分がある。こうした領域ごとに専門性を深めることで生態学は発展してきたが、実際には階層をまたいで作用する働きやメカニズムもあるので、特定の階層だけにピントを合わせているだけでは説明できない現象やパターンも自然には数多く見られるはずである。

この本が取り上げるのは、このような階層と階層の間、すなわち生態学の境界領域に残された問題である。特に、遺伝子、種、生態系という3つの階層の間に働く相互作用に着目する。本の表題からも分かるように、これらの階層をつなぐすがいとも言える「階層間フィードバック」を切り口に、「生態学の領域融合」を目指すという大きなスローガンを掲げた渾身の1冊である。章によって著者が異なるので、以下では各章の内容を(ごく簡単であるが)紹介したい。話題はとても多様だが、いずれも、群集を起点とした階層間フィードバックという共通点で関連している。(1) 進化と群集、(2) 群集と生態系、(3) 進化、群集および生態系という、各領域の接点を主題とした3部構成である。平凡な感想で恐縮だが、全体を通して興味深く、新しい話題も多く盛り込まれているので大いに刺激を受けた。

「進化と生物群集をつなぐ」と題された第1部は、進化と群集の統合を俯瞰的に解説した読み応えのある総説(1章)から始まる。形質をキーワードとして、進化学と群集生態学という2つの領域が辿った乖離と再融合の歴史と、進化と群集をつなぐ基本的な過程(群集遺伝学、拡散進化、および迅速な進化が駆動する生態・進化フィードバック)が整理される。また、進化と群集を結びつける興味深い実証研究が幅広く紹介される。2章では、モンシロチョウ属のチョウを取り巻く群集で生じた、急速な進化の連鎖が紹介される。新しい種の加入をきっかけとして、群集構成種の食草や寄主が驚くほどの短期間で転換する。さらにその変化が、捕食被食関係や競争関係、あるいは繁殖干渉を介して他種に伝搬して、群集全体が急速に変わりうるという「断続平衡」的な見方が示される。3章では、生物学的侵入の過程において、外来種に作用する生態・進化フィードバックに焦点が置かれ

る。外来種の進化的変化があることによって、在来群集に対する影響がより大きく、外来種の駆除がより困難なものになる可能性が指摘されている。進化を踏まえた外来種管理の概念モデルが示されていて、興味深い。4章では、サケ科魚類における河川残留型と索餌回遊型の意思決定過程と、その進化をモデル化した理論研究が紹介される。変動する環境下では、残留型と降海型の密度比を安定化する意思決定様式が進化しやすいことが予測される。

群集と生態系のつながりを主題とする第2部は、両者を結ぶ重要な概念である、生物多様性と生態系機能の関係を扱った総説(5章)から始まる。このテーマに関する研究の進展と現在の到達点が、分かりやすく整理されている。6章では、湖沼生態系のレジームシフトにつながる階層間フィードバックとして、生物による自身に有利な環境変化(自己促進効果)に焦点が当てられる。自己促進効果に加えて、外来種の侵入や間接相互作用といった要因を踏まえた湖沼生態系管理のアプローチが議論される。7章では、微生物生態系の解明に有用な分子生物学的手法の解説とともに、環境の変化に対する微生物群集の応答とそのメカニズムが、主に環境汚染の文脈で説明される。微生物では、汚染物質の分解や耐性に関わる遺伝子がプラスミドやトランスポゾンといった可動性の塩基配列に符号化されていることが多く、群集内に蓄積されたこれらの遺伝子が種を超えて交換されることで群集のレジリエンスを高めているという。マクロ生物では見られない固有の相互作用が微生物群集の機能を支えているようだ。8章では、植物と土壌の間のフィードバックが扱われる。このフィードバックを介する要因の1つは、樹木と共生関係にある菌根菌である。菌根菌は、樹木との間で炭素や栄養塩を交換するだけでなく、菌根のネットワークを介して樹木個体間での物質のやりとりを仲介している。菌根菌の2つのギルドであるアーバスキュラー菌根菌と外生菌根菌を比較すると、これらを介したフィードバックの方向性は明瞭に異なっており、この違いが樹木群集の遷移や多種共存を大きく決定付けている可能性が示唆されるという。9章は、大気・土壌・海洋と生態系の間で作用する地球規模のフィードバックに着目した章である。地球温暖化のような大規模で複雑な問題に対処する上で、単純化されたモデルの下で不確実性を踏まえた予測を行うことの重要性が説かれている。

第3部の主題は、進化生態学・群集生態学・生態系生態学という3領域の接点である。10章では、マイクロコズムの長期実験で観察された、個体数や相互作用、物質やエネルギーの流れの興味深い変化が紹介される。複数の階層を同時に捉えた綿密な観察から、進化を駆動する選択環境はそれ自身が進化の影響を受けて変化するという、動的かつ包括的な視点が強調される。11章では、化学合成細菌における呼吸の多様性が取り上げられる。生態学と生物地球化学を融合するモデル化のアプローチによって、化学合成を行う酸化細菌と還元細菌が、呼吸を通じた栄養共生パートナーとして同じ化学種をリサイクルし合うことで、個体群の存続と安定したエネルギーの流れを実現することが示される。12章では、捕食者(ミ

ジンコ)と被食者(植物プランクトン)からなる群集に、生態化学量論的な制約を導入した数理モデルが紹介される。植物プランクトンの細胞中の元素比は、光が強くなるほど炭素が支配的となる。これが原因で、強光下では、餌がたくさんあるはずのミジンコは栄養失調となり、個体群が縮小してしまう。この系においてミジンコの炭素:リン比が適応的に進化すると、強光下での個体群動態は不安定化し、かえって絶滅リスクが増してしまう。13章では、小笠原諸島の陸貝の例を中心に、適応的な種分化(適応放散)と中立的な種分化(非適応的放散)の観点から、海洋島の生物群集を形成する進化的な過程が論じられる。海洋島では、人類による外来生物の持ち込みが在来群集に深刻な影響を与えているが、これは結果として、海鳥や陸貝などの固有の生物相を支えられた物質循環の改変と、海洋島を特徴付ける独特な進化的過程の喪失につながっている。固有の種多様性や遺伝的多様性の保全に加えて、従来の進化的背景が維持された生態系の修復の必要性が説かれている。

これらの13章に、コンパクトだが充実した内容の2つのコラムと2つのテクニカルノートが加わる。総勢18名もの著者が関わる本書は、編者の門脇氏が中心となって継続して開催されてきた「進化群集生態学シンポジウム」の成果を広く伝えるために企画されたものだという。総論的な序章と終章からは、この問題に対する編者たちの並々ならぬ意気込みに加えて、現代を生きる生態学者としての強い使命感のようなものまで感じられた。

本書でも述べられている通り、階層間フィードバックの概念はそれ自体、必ずしも新しいものではないと思うが、複数の異なる機運を背景として、むしろ現代的なテーマとして未だ多くの研究の余地があるようである。一方で、この問題に取り組むためには、特定の階層に関する十分な知識に加えて、複数の階層(=分野)を見渡す広い視野や多様なアプローチが要求されるのではないかと想像する。馴染みのない概念や用語に四苦八苦しなから、専門とは異なる分野の関連文献をレビューすることにもなるかもしれない。やってみればそれも楽しいと思うが、1人の研究者の専門性にも限りがある。だから、こうした境界領域の問題では、おそらく例外なく、得意分野の異なる研究者の間での積極的な議論や協働が必要で、それがなければ良い研究も生まれにくいだろう。おそらく多様性の利点がここにもあり、様々な興味や専門、技術を持った研究者がコミュニティにいたることが、階層間フィードバックのような学問上のフロンティアを切り拓くための潜在力につながるのではないかと思う。

生態学の領域融合は、それ自体が目的ではない。むしろ、総合のための手段であり、その先にある新しい理解と応用が本書の指し示す次の目標である。この問題に対する編者・著者たちの展望は、ぜひ実際に本を手にして読んでいただきたい。

(国立環境研究所 深谷肇一)

石井弘明編(2019)「森林生態学」朝倉書店 173pp.
ISBN: 978-4-254-4754-3 定価 3,200円+税

ネットニュースを見ていたら、アマゾンで記録的な森林火災が発生し、地球の酸素の20%を供給している「地球の肺」アマゾンが大変なことになっている、という記事が目に入った。熱帯林破壊の問題が広く認識されはじめた何十年も前に言われていた誤解、「アマゾンは地球の肺」という言葉を今でも使っているのは誰だ、と思って、出どころを調べると、なんと、イギリスBBCや日本の新聞社など、著名なマスコミも入っていることがわかった。「森林生態学」を少し知っていれば、熱帯雨林でつくられた酸素のほとんどが生態系内で使われてしまうことは常識だろう。世界に流れたこの誤解は、炭素循環の専門家らの解説記事によってほどなくして訂正された。しかし、私は、「森林生態学」の常識が世間の常識ではないことをあらためて思い知らされた。生態学者は「森林生態学」の常識を社会に普及する努力をもっともっとなさなければならないのだと感じた。

さて、本書である。この本の「はじめに」には、「本書は、森林生態系の仕組みについて学びたい人のために書かれた入門書である」と書かれている。本書の特色は、以下の2点だと思う。1) 森林生態学の多様なテーマを網羅しており、特に生産生態学の説明が充実している。2) 生態学や森林科学の専門でない読者にも読みやすいように工夫されている。「アマゾンは地球の肺」を非常識と思ってもらうには、うってつけの本である。

本書の構成は、以下の通りである。

- 第1章 森林生態系と地球環境
- 第2章 森林の構造と動態
- 第3章 森林の成長と物質生産
- 第4章 森林土壌と分解系
- 第5章 森林生態系の物質循環
- 第6章 森林生態系の保全と管理

3~5章は、生産生態学に関する内容で、全頁の64%を占める。ただし、第3章には、生理生態や樹木の成長戦略が2/3ほど含まれる。それでも、正木隆・相場慎一郎編(2011)「森林生態学(シリーズ 現代の生態学 8)」(共立出版)で、生産生態学に関する章(「森林の土壌環境」と「森林の物質生産」)が全体の16%しかないことを考えれば、本書が生産生態学に多くを費やしていることが分かる。本書には、森林の生産生態学の理解に必要な多くの情報が盛り込まれている。これは、本書が、堤利夫編(1989)「森林生態学」を改訂した後継書であり、本書の著者15人全員が、生産生態学を伝統としてきた京都大学森林生態学研究室の出身であることも関係しているように。

一方で、前著からの大きな改訂点として、この数十年に森林生態学で発展した生産生態学以外のトピックス(例えば、繁殖生態、成長戦略)と生態系の保全・管理についての最新の情報が盛り込まれている点あげられる。こうした項目の追加によって、本書だけで、ある程度、森林生態学の全体を俯瞰することができるようになっていく。また、京都大学森林生態学研究室出身の研

究者が、多様な分野に広がっていったことも見て取れる。

第2の特色である、「専門でない読者への配慮」として、まず、そのコンパクトさがあげられる。本書は全体で173ページしかない。現在、手に入る他の類書、正木隆・相場慎一郎編(2011)「森林生態学」(共立出版)、藤森隆郎著(2006)「森林生態学 持続可能な管理の基礎」(全国林業改良普及協会)、岩坪五郎編(1996)「森林生態学(現代の林学12)」(文永堂出版)が、300～500ページの教科書であることを考えると、本書は初学者でも手軽に読める、まさに「入門書」と位置付けられるだろう。本書で、興味を持った箇所を上記の教科書や他の文献で、さらに詳しく調べるための導入の役割を果たすことが期待される。願わくば、さらに詳しく知るために読むべき文献のリストが欲しかった。

また、幅広い読者への配慮として、各章の最後に、その章の内容が、私たちの環境や社会とどう関係しているかが述べられている。さらに、その後に「発展問題」として、具体的な課題がいくつか提示されている。例えば、「森林の現存量と物質生産」の発展問題は、『新聞記事「温暖化で森林が発生源に？」(2009.11.18朝日新聞)を読んで、なぜわずか数年で実験林がCO₂のソースになったのか考察しなさい』である。この問題に正確に答えられれば、アマゾンの熱帯雨林が「地球の肺」でないことは容易に想像できるだろう。

本書が、生産生態学を中心とした森林生態学の入門書として生態学初学者に読まれると同時に、専門外の人たちに「森林生態学」の常識を広めるための入門書として広く活用されることを期待する。

(大阪市立大学理学研究科 伊東明)



京都大学
生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2020 (令和2) 年度 共同研究公募のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、2010 (平成22) 年度から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として活動してまいりました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や研究集会・ワークショップなどの公募を毎年行っています。2020 (令和2) 年度の公募につきましては11月より開始の予定です。詳細はメイリングリストでご連絡いたします。また、センターホームページにも掲載いたしますのでご参照ください。



『脱窒菌同位体比測定法ワークショップ2019』

開催日：2019年5月20日～5月23日 開催地：京都大学生態学研究センター

問い合わせ先：木庭啓介（京都大学生態学研究センター・教授）(E-mail : keikoba@ecology.kyoto-u.ac.jp) ※ 終了しました

『若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖』

開催日：2019年8月10日～8月16日 開催地：京都大学生態学研究センター、琵琶湖

問い合わせ先：中野伸一（京都大学生態学研究センター・教授）(E-mail : nakano@ecology.kyoto-u.ac.jp) ※ 終了しました。

『安定同位体生態学ワークショップ2019』

開催日：2019年9月1日～9月6日 開催地：京都大学生態学研究センター

問い合わせ先：木庭啓介（京都大学生態学研究センター・教授）(E-mail : keikoba@ecology.kyoto-u.ac.jp) ※ 終了しました。

『植物に対する環境ストレスの影響 - 植物生態系の機能と生物多様性の保全を目指して -』

開催日：2019年9月26日 開催地：京都大学理学部セミナーハウス

問い合わせ先：伊豆田猛（東京農工大学大学院 農学研究院・教授）(E-mail : izuta@cc.tuat.ac.jp) ※ 終了しました。

『光合成の起源と進化、その古地球生態系における役割』

開催日：2019年11月16日 開催地：京都大学理学部セミナーハウス

問い合わせ先：花田智（首都大学東京大学院 理学研究科・教授）(E-mail : satohana@tmu.ac.jp)

『第11回生物地球化学研究会2019年度研究発表会および「有明海の生態系異変に関する現地講習会」』

開催日：2019年12月7日～12月8日 開催地：長崎大学環境科学部（講演・発表）および有明海周辺地域（現地講習）

問い合わせ先：高巢裕之（長崎大学大学院 水産・環境科学総合研究科・助教）(E-mail : takasu@nagasaki-u.ac.jp)

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員(一般)	9500円	○	○
正会員(学生)	6500円(2018年以前) 4500円(2019年以降)	○	○
賛助会員	年会費 20000円/22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・Ecological Research 8000円
- ・日本生態学会誌 600円**
- ・保全生態学研究 2000円**

**非会員に向けた学会誌(冊子体)の定期購読料は、以下の年額となります。

- ・日本生態学会誌 9,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-5937-2721 Fax: 03-3368-2822